

平成26年5月5日発行(毎月5日1回発行)

第54巻5月号(通巻638号)

風土



5

わらび餅

神蔵

器

乳張つて牛の泪目桃の咲く

蘗ゆる四尺二寸大銀杏

まさをなる天上大風囀れり

たましひのあそびせむとや月朧

生きるより死はなつかしく春彼岸

起きてみつ寝てみつ亀の鳴けるなり
風車長らく亡妻を待たせをり
病み臥して漲るいのち冴返る
酷寒やふくみて甘き鎮痛剤
春眠の一刻千金きはまりぬ
てのひらに太陽いつぱい良寛忌
水取のきのふに了りわらび餅



竹間集

同人作品



あけくれ

塩田博久

引き剥がす二月の暦春遅し
そぞろ行く春先の花みな黄色
梅蕾む楮に珠の数知れず
ポトハウスのペンキ塗り立て水の春
おむすびの取りかへつこや百千鳥
春暁や句はあけくれに詠むべかり
露味噌や句はあけくれを詠むべかり

浅 春

田中佐知子

風生忌富士玲瓏と湖に立つ
浅春の光差し込む産屋かな
雪解の天地根元造りかな
原子炉を傾けてゐる若布刈舟
梅東風や連歌所跡に井戸ひとつ
うぐひす餅雪まだ止める気配なく
鳥帰る縄文遺跡川に沿ひ

春吹雪

工藤ミネ子

児を櫓に遊びのやうや市帰り
根開きの柴一本にもありぬ
春吹雪呑む総立ちの杉林
雪搔いて雪搔いて歳太くする
杉山はいつも聞き役春吹雪
春泥や平地に御座す村の神
菜の花の潮満ちて来る干拓地

野 焼

柴田 久子

バレンタイン明日に子の焼くケーキの香
対岸の樹形を崩す野焼かな
風にまだ馴染まぬ野火のひとつとこ
僧一人畦道歩く野焼かな
野を焼きて風の形の見え来たり
あたたかや昼の葉をまた忘れ
ぽつかりと手の空く春の窓辺かな

鬼やらひ

中村 洋子

鬼やらひ福紙の付く五円受く
白魚舟ひかりの中に人動く
白魚のひとつひとつに影ありぬ
山焼きに染む二月堂三月堂
みちのくのかくれキリシタン絵踏かな
手の甲に露味憎貰ふ物産店
梅真白極楽橋を渡り来て

寒明け

橋添やよひ

寒明けや空の一枚剥ぐごとく
大宰府につづく空なり梅真白
風花や吹き余したる連歌井戸
雪雲や影向の松位を正し
うぐひす餅廓ことばのひとつに合ふ
梅さむし源平の名を咲き分けて
砂紋浮いたる春雪の門跡寺

不思議な穴

南うみを

らふ梅を挿して空気の動かざる
残雪に刺さりて道路横断旗
座禅草この世の枯れを突きぬけて
蜷の道混み合うてゐて交はらず
実朝の濤へみひらく椿かな
野を焼いて不思議な穴のあらはるる
干し若布風に水平飛行せり

泣き上戸

島谷征良

伐つてきし松を飾や鄙社
お年酒のまはりて嫁は泣き上戸
福寿草つばみ余さず咲く構へ
お祝儀の高値見越して初糶す
情強きをんなの庭の寒椿
冬の蝶まことに薄き影を生む
枇杷咲いて海の日和のつづきをり

梅の花

宮川みね子

ふるさとの墓ふさはしき冬すみれ
薄氷に灯る外科医の非常口
春隣控へ目にある竹箒
ふつくらと志功の版画あたたかし
風呂敷の藍の匂ひの春浅し
みづいろの色に暮れゆく春の雪
御仏の耳たぶゆたか梅の花

強東風

浜

福恵

強東風に攫はれまいぞ浜千鳥
子を待つて波間に光る鳩
かすかなるうねりを海へ雪解川
過疎を守る蒺藜草のいきいきと
流木の浜を出でゆく浅蜷船
寄す波に群るる鷗や卒業期
珈琲に泛ぶミルクや蜃気楼

雪の夜は

山田

暢子

洗面器に熱き湯を入れ雪催
大雪となりけり小さき窓明り
雪搔きに一人二人と増えて来し
雪搔きの遂にマフラーなど外す
捨てられて白き砦となりて雪
雪の夜の搜瓶銀河の音のする
雪の夜はらんぶが欲しくなりにけり

瀧 祭

南 うみを

岩を踏み浮き根を跨ぎ瀧祭
夏落葉厚く寄せあり籠堂
野菜売る幟も建つて瀧祭
瀧壺に冷やして祭酒一斗
瀧飛沫かかると祠へ生卵
注連縄にひとたび消えて滴れる
太鼓据ゑる男瀧女瀧と拜みぬ
瀧神へ体ぶつつけ太鼓打つ
瀧垢離の雫の衣枝に干す
神木を登りかけたる蟬の殻

山河集

同人作品



神蔵 器選

雪しんしん木々に一夜のオブジェかな

安永 圭子

手に掬ふ土のつぶやき春めけり
春の水曲がりつつ田川流れ行く

鷹鳩と化し一言主神の前

寒紅梅立ち続ければ亡母に会ふ

きさらぎや墨に齢のあると言ふ

内藤 静

乙女らの野火放たんと矢を番へ
下総や野火のけむりの青くして

春の水へレン・ケラーの手に流れ

早春やどの燭となく潤みぬて

鳩潜りゆつくり育つ水輪かな

柿沼 盟子

春雪や抱きて届く小さき荷

絵はがきの余白に追伸鳥の恋

梅開く居抜ききの店に暖簾出て
千号の油彩画の前春立ちぬ

テーブルに朱書きの合格通知あり
林 いづみ

風光る朝より箸置き蔵手に
水耕の皿に注げり春の水

きさらぎのあづま通りに仏画展
浅春の一筆箋選る鳩居堂

八百年の柏楨寿福寺木の芽風
仙田 孝子

天神の朱塗の社殿梅ふふむ
束帯の貫之の切手梅二月

条幅の良寛の一首も春の歌
まづ終へて確定申告春の雨

◇特別作品◇(抄)

上洛

山本 町子

思ひ出のよぎる車窓や藁ぼつち
藁屋あり築地塀あり柚子は黄に
片思ひにも似て田家の冬構へ
息子の待つプラットホームの小春なる
向ひたる三条大橋百合かもめ
白河の木々の裸に虹淡し
「湯豆腐」や暖簾の丈のさりげなく
子と辿る南禅寺領冬紅葉
背に肩にあそびのごとく紅葉降る
竹林の風にこぼるる檀の実

風土集



神蔵 器選

涅槃図に両手を付いて膝進め 東京

林 いづみ

イーゼルを立てしところにいぬふぐり

春の雪甲斐一国を閉ぢ込めて

たがはずに掛かる電話や龍太の忌

軒裏の水かげろふや下萌ゆる

つぶやけば一語たふとし冬薔薇

福生

雨宮 桂子

探梅やトンネルにあるワイン蔵

紅梅や初島航路近くせり

冴返る説法柱の黒びかり

寒明のお会式桜空に撒く

相模原

岡本 尚子

捨て水の薄氷となる高山寺

筒茶碗仕舞ひてをれば淡雪す

幾つかに名前を変へて春の川

淡雪の溶けしわが手のぬくみかな

きのふより今日より明日牡丹の芽 さいたま

須藤美智子

一人出てやがて総出に雪を掻く

白魚の数多の眼我を見る

初午や王子稲荷の火伏札

立春に降るはずなはち春の雪

囀や枝先に揺れ残りたる 高槻

浅田 光代

老いたれば見ゆるものあり葶草

座禅草「そつとのぞいていいですか」

春禽のきらり若冲居士のうへ

春の鴨数へつくしてしまひけり

岡山

高村 令子

風は詩水はメロディー青き踏む

下萌ゆる火の見は風の交差点

寒禽の背に姦しくシートツ干す

干布団急ぐ太陽折り畳む